

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

版 B6判
三五二頁
三五〇〇円

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経緯を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重宝なし

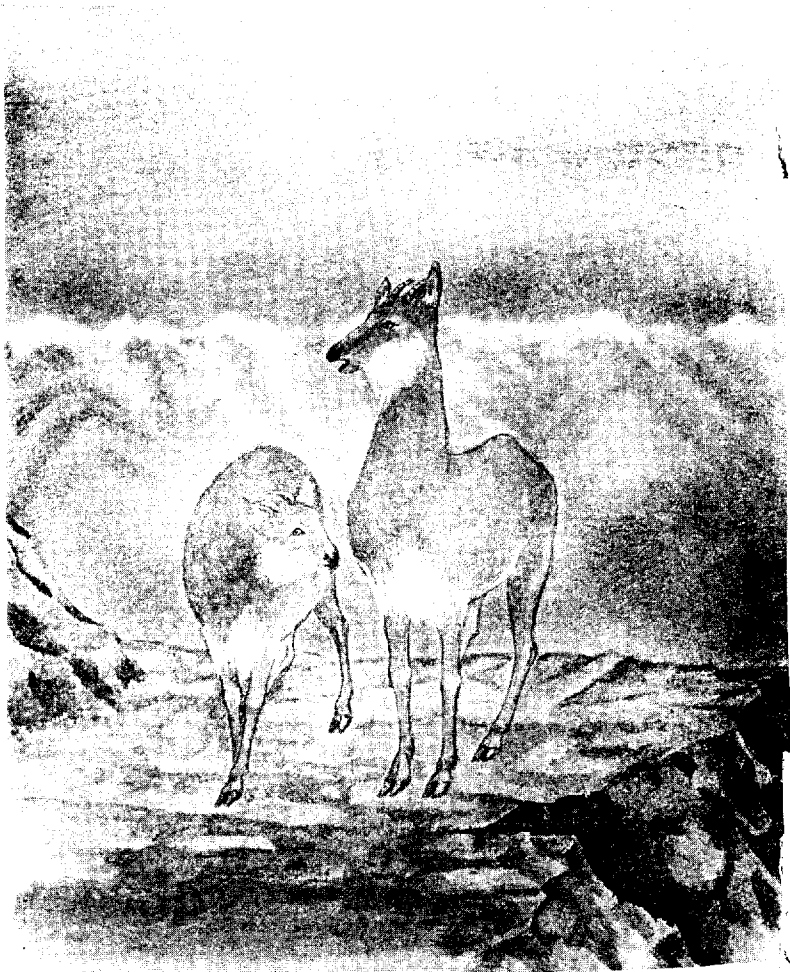
大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモック・不快指数などをまとめて収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

第33 連句 季刊



国語学大辞典 B5 一〇〇〇円

国語慣用句大辞典 A5 八〇〇円

国語慣用句辞典 B6 三〇〇円

国語史辞典 B6 三〇〇円

日本語源辞典 B6 一八〇〇円

京都語辞典 B6 一〇〇〇円

擬音語擬態語辞典 B6 三〇〇円

隠語辞典 B6 三〇〇円

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 B6 三〇〇円

明治新語俗語辞典 B6 三〇〇円

難訓辞典 B5 三〇〇円

名乗辞典 B6 二〇〇円

名数詞辞典 B6 二〇〇円

あいさつ語辞典 B6 二〇〇円

新版こぼ遊び辞典 B6 二〇〇円

類語辞典 B6 二〇〇円

類義語辞典 B6 二〇〇円

表現類語辞典 B6 四八〇〇円

新版文章表現辞典 B6 一六〇〇円

花と桜(南柏雑記 31) 1
 二十韻私見 柴崎正寿郎... 2
 —「座の文学」を守るために—
 孤高の俳諧師 東明雅... 4
 —石洲橋本隆介師のことども—
 歌仙三巻 膝送り 猫 柳(東明雅・草間時彦・古館曹人)
 両吟文音 北 斎(片山多迦夫・東明雅)
 花あかり(捌 坂本孝子)

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第三十七回 猫蓑会 11
 第一部 正式俳諧興行 (一)役割 (二)次第
 二十韻 藤浪の 捌 秋元正江
 文 藤の幻影 秋元正江
 第二部 二十韻 九巻 捌 東明雅・内田麻子・金久保淑子
 上月淳子・下坂元子・豊田好敏
 中川 哲・山口みづゑ・若松 香
 文 「配硯役」うわの空の記 梅田利子
 座配をつとめて 小林千雪

「蓑虫」付勝練習 二十韻 東明雅... 18
 「猫蓑作品集 I」を読んで 仏淵健悟... 20
 芦丈翁俳諧聞書 (I) 22
 二十韻 風の訪ひ来る 捌 文 矢崎 藍... 24
 歌仙 啓蟄や 捌 滝川雅代... 25
 関口連句教室 歌仙二巻 花の雨 無縁坂 ... 捌 下鉢清子・秋元正江... 26
 半歌仙 行く秋を 捌 秋元正江... 27
 二十韻 風光る 捌 式田和子
 二十韻 夜神楽 捌 青木秀樹
 雁帛往来 29
 新刊紹介 23・27

表紙(かもしか) 宮崎 龍火子

☆ の一二三、三、生率率(同一)

同四・一%増(同一・三%増)
 四%減)の二二五・五、在庫は
 出荷は同七・八%減(同六・

☆ の停滞傾向が続くものと通産局
 ではみている。天

マイナスに転じた。当面、景気
 なった。前月比は三カ月ぶりに
 八と十二カ月連続の前年割れと

☆ 生産は前年同月比九・一%減(前
 月比六・八%減)の一一九・
 年一〇〇、速報)によると、
 月の管内鉱工業動向指数(八五

 〃10・1名古屋・村瀬

10月01日 15時52分
 HCAZ02 正 初校
 HZ[A]中部/景気は当面、停滞

年々に花にあこがれ見たいと思う気持ちが募るのに反して、実際、その見た桜に対する感動が次第に薄れて行くように思われる。

私が日本の名桜を出来る限り尋ねようと決心したのは、昭和六十一年、猫養会有志と吉野に行った時以来である。

この時、有名な竹林院に宿して、その翌日見た花の美しさは、この地の史蹟にまつわる思い出と一緒にあって、何か妖しいこの世ならぬ美を示してくれた。

それ以後、花に憑かれた私は毎年春になると、東京近郊の桜はもとより、北は福島県三春の滝桜、信州高遠の小彼岸桜、岐阜根尾谷の淡墨桜、小田原入生田の桜、京都常照皇寺の九重桜、大阪広川寺の西行桜、はては沖縄本部の寒緋桜と、機会を見てはうかれ出るのは、もはや限られた余命の為であろうが、花を見たいと願う心に反比例して、桜を見た時の感動が薄くなって行くのは何故であろうか。

今年四月九日に「日本さくら地図」を便りに、青梅市の金剛寺と梅岩寺を尋ねた。両寺とも折から満開の紅枝垂は確かに見事であったが、それだけで、あの吉野で味わったような感動はおこらなかった。それから十日ほど経って、

私は思いがけず大阪造幣局の「通り抜け」の花を見ることになった。「通り抜け」は、御承知の通り、八重桜の並木が絢爛豪華で、有名ではあるが、何か俗な感じがする為だろうか、「日本のさくら地図」の中にも掲載されていない。しかし、猫養の連句にはしばしば花の句に、この「通り抜け」が登場して私も一度は見たいと思っていた。

その日は前日からの風雨が強まって、吹き降りの天気であった。たまたま、京都のホテルのラジオニュースで、当日が「通り抜け」の観覧期間の最後にあたると聞いたので、予定を変更して急遽、大阪の天満橋駅まで直行し、傘を傾けながら濡鼠になって造幣局に赴いたのであったが、この悪天候がかえって幸いして、晴天ならば鯉つめの押すな押すなであるという花見の客も疎らであった。

楊貴妃・御衣黄・普賢象など、名前だけはよく知っている大輪の八重桜が、それこそ真盛りで、それぞれ風雨の中に身もたえするように、枝を揺らしながら妍を競っている有様は、私に何時か吉野の花を見た時のような妖しい感動を与えてくれた。これが花なのである。

金剛寺や梅岩寺の桜を見た時は、例の「日本さくら地図」で予備知識があり過ぎたのである。「通り抜け」の場合は全くその逆であった。「秘すれば花」と言った古人の意がよく分かったとともに、花と桜の区別もどうやらおぼろげながら分かって来たようである。

二十韻私見

—「座の文学」を守るために—

ここ数年来、連句界には新しい連句形式が次々と創案されていく。芭蕉以降、連句形式の中では歌仙(三十六句)が主流をなし、連句といえは三十六句の歌仙という程に、歌仙が一般的な形式として定着していた。それが最近になって、歌仙より句数の少い新形式が生れるようになったのは何故か。結論を端的に云えば、連句一巻を巻きあげるに要する時間の短縮である。では何故時間の短縮が要請されるのであるか。それは連句という詩の問題ではなく、むしろ現代人の生活のあり方に関する問題である。現代生活は交通も通信も非常にスピード化し、人々のコミュニケーションは大変拡大した。それにも拘らず、現代人は何故か慌しくせわしい生活に明け暮れている。その原因は何なのか、その詮索は社会学者に委せるとして、吾々連句作者もより短時間に首尾完成した連句一巻を巻き上げたい希望を持つ。それは現代人の常に時間に追われる慌しい生活様式から必然的に生れてくるようである。

私はかつて関西で連句教室を持ったことがあった。勉強にくる人の多くは家庭の主婦であり、その家庭は市中にはなく、市周辺の郊外にある。会場はどこからも平均して集りやすい市の中心部にあったが、集合時刻を昼食後の午後

柴崎正寿郎

一時にした処、かなりの遅刻者があった。主婦たちは、家庭の昼食を済ませ、その後片付けまでして出てくるからである。よって集合を一時半に改めた。終了時刻も右の時間から逆算すると、四時か四時半が限度である。もしそれを越すと六時の夕飯仕度の為に反対に早退者が出るであろう。以上のように現在大都市で連句会勉強会を実施すると、その勉強時間は正味二時間半か三時間位が限度となる。この時間で三十六句の歌仙をまくのは無理であり、実際に半歌仙で終ることが多い。この半歌仙を次回に続けることは、連衆の異動もあり、折角の気分も中絶のため、序破急の面白みも失われ、作品として成功しにくいし、何よりも座の文学としての興趣は半減する。東明雅先生の近刊書「新炭俵」に「二十韻の提唱」の一文があるが、それによると、歌仙一巻を巻くのに平均四時間という。これに会場往復時間二時間を加えて、六時間の拘束時間は、家庭の主婦にとってはその気楽にとれる時間ではない。

そんな折、岡本春人先生が、半歌仙と同じ十八句ながら、歌仙と同じ内容効果をあげるため、表六句の禁忌を緩和して、序破急のテンポを早める「居待」「出花」などの新形式を創案した。私たちはこの新形式によって、短時間内に、

ともかく一巻首尾の連句が巻けるようになったのである。ただ後で考えると、私たちは既に歌仙用の勉強用紙を持ってをり、たまたま十八句が歌仙の初折句数と同じのために、便宜上その用紙を利用した。実はこれがよくなかったと思う。春人先生の「居待」創案の意図や式目緩和によるテンポの改新など十分理解しながらも、同じ句数、同じ用紙から、連衆は仲々歌仙風な句運びから脱出できないようであった。それに何んといっても最大の原因は新形式に未習熟な私の捌である。

それから程なく、私は明雅先生が新形式二十韻を創案された事を知った。私は春人先生の居待形式の経験から、まず自身が新形式に習熟することが大切と考えた。私は明雅先生門の式田和子さん秋元正江さん次いで福井隆秀さんについて文音による二十韻の指導を受けることにした。そしてグループの勉強会では二十韻専用紙を使うことにした。これは加成の効果があったようだ。用紙の形式から新形式の認識が形によってまず捉えられたからである。また二十韻は半歌仙の十八句より二句多い二十句構成であるが、伝統ある歌仙と同じく二つの折と表裏を持つことで馴染やすかったようだ。歌仙三十六句は、所要時間が現代人の生活時間帯から取りにくくなったとは云え、内容的には四季それぞれの多様さ、二花三月の配分、表・裏、折などの設定による序破急の変化進行の面白さ、恋の場面も異なる二場面を出しやすさ、など巧みな構成が確立している。先人が遺したこの素晴らしい形式の内容を、時間短縮の新連句形

式に於てどれだけ守れるか―それが最大の課題であったと思う。明雅先生の二十韻は、実作者でありまた連句研究の第一人者として、一巻の所要時間を二時間半から三時間を限度とした場合、表裏ある二折を残す句数として、二十句が歌仙に近い内容を守るぎりぎりの線だったのである。ただ単に時間短縮だけを考えるなら、二、三句の短連句を始め、昔から色々の形式もある。連句の時間短縮は、連句一巻の内容と深くかかわる問題である。伝統ある歌仙の内容を保持しながらの時間短縮として、二十韻は成功している形式だと思ふ。

連句の先人たちは「座」によって何人かの連衆が「時」と「処」と「情感」を共有しながら、ゆっくりと座の時間を築きみつつ作ったものと思う。その連句から、現代は時間の共有を奪わうとしている。時間短縮の連句新形式は、そうした時代に対する抵抗である。試みに平成二年度の連句年鑑をみて頂きたい。掲載作品の約半数は連句という座の文学の大切な要素である時間の共有を離れて文音形式という時間に余り拘束されない道を歩み始めている。かつての座の文学は次第に通信文学に変貌してゆくかも知れない。連句一巻の時間短縮は、それによって多忙な現代人にも句座する機会をより多く与える一手段として理解したい。明雅先生も春人先生もそういう意味で新形式を工夫されたものと思う。

私は連句形式の時間短縮化は「座の文学」を守るためにこそ大きな意味があると思っている。

孤高の俳諧師

東 明雅

―石洲橋本隆介師のことども―

石洲橋本隆介師は、明治三十五年五月十九日、三重県伊勢市で出生、昭和六十一年一月二十一日千葉県船橋市で逝去された。伊勢はもともと俳諧の連歌発祥の地であるが、師の家は歴代、伊勢外宮祠官年寄師職並びに徳川幕府直轄伊勢山田奉行所の御旗本支配組頭の家筋で、早くから伊勢派の俳諧師野末汀鷗に学び、二十歳で正風伝統の立机を許され、事実上、荒木田守武（一五四九没）に発し、岩田涼菟（一七七七没）・中川乙由（一七三九没）から、和田希因（一七五〇没）、三浦樗良（一七八〇没）を経て、明治・大正の大主耕雨まで、輝かしい歴史を残した最も正統の伊勢派俳諧のいわば最後の俳諧師だったのである。

私は師の生前、お目にかかったこともなく、また、同じ千葉県に住みながら、実はそのお名前さえも存じ上げなかった。平成二年十二月、柏連句会の席上、連衆の一人五十嵐譲介君から教えられて、遺著「正風俳諧 左義長」の出版を知り、早速、御遺族の橋本宣彦氏に連絡して、その一冊を頒けていただいた。

その後、橋本氏から丁寧なお手紙とともに、昭和三十一年刊の「俳諧芭蕉の雫」、昭和四十六年刊「俳諧陽田の土」、

昭和五十五年刊「正風俳諧新秋津洲」の三部も頒けていただき、始めて伊勢派俳諧師としての石洲師の全貌を知ることができた。

そもそもこの伊勢派という名称には二つの意があるようである。それは「俳諧大辞典」にもある通り、①守武の遺風をついで、望一（一六六七没）以来伊勢に育った俳団体の総称。②涼菟・乙由を中心とする伊勢蕉門の意。この二つである。

②の伊勢蕉門は各務支考（一七三二没）の山田結庵以来急速に発展して、涼菟・乙由を中心に強固な地盤をかためた。そして遂には北陸筋にも勢力を伸ばし、支考の没後は、加越の俳諧は概ねその傘下に帰したという。

猫衰派の俳脈を遡ると加賀の北枝（一七一八没）―希因（一七五〇没）―関更（一七九八没）などの錚々たる伊勢派の俳諧師に達するのであるから、猫衰派が右の②の意味において伊勢派と称することはむしろ当然であるが、石洲師の俳諧は右の②とともに、①の条件にもびたりとあてはまっている。いわば、石洲師の俳諧は、末流伊勢派とでも言うべき猫衰派から見れば、その本家筋にあたると言ってもよいものである。今まで知らなかった伊勢派本流の俳諧の実態が、石洲師の著書を通して明らかになったことは嬉しかった。

「芭蕉の雫」（昭和三十一年刊）は、「正風俳諧の伝統美」という論文を巻頭に、歌仙八十九巻、百韻六巻を掲載

附録として「雲夢書齋詩集」を収めている。また、この書には「全国蕉門連衆名録」として、当時の俳諧師百三人の名が記されている。

この百三名の中には西尾其桃の外、無名庵主小野霞遊・駿河の加藤一兆・埼玉の宮内富宝・大分の上田鷹居・出雲の山内好一など、当時著名だった俳諧師を網羅しているのは、当時の伊勢俳諧の立場と力とを示すものであろうが、その中に、当然ながら信濃の抱虚庵根津芦丈の名が見えるのが懐しい。自賀石洲巖父還暦全国匠匠文音連吟「蒲公英」の巻にナオ十句目として、「組盃を飾る床しさ 芦丈」と見えているから、石洲師は芦丈先生と風交があったことが察せられる。

また同書には、石洲門として三峯庵南天・神風館窓月・花下亭二季・半日庵蝸牛の名が載せられ、その外に伊勢市在住の俳諧師三十二名の名が連ねられ、当時の伊勢俳諧の盛況を物語っている。

「芭蕉の雫」所収の歌仙八十九巻の中には漢和三巻、和漢五巻計八巻が含まれている。一例をあげれば、

自賀長男品彦誕生 昭和八年五月

和漢行 初職の巻

武の誉文の栄に初職

稱檀放腹庭

袴客礼儀作法も弁へて

さもうまさうに哀吸ひけり

風前孤月黄

石洲 翠影 楓園 影 洲

はずばらしいものであるが、美濃派とともに平俗を旨とする伊勢派の伝統にはあまり見られぬものである。師が少年の頃から親しまれた漢詩・漢文、あるいは日本の古典の知識があまり深く薫染していたために、師自身も自らそれに制約された面があったのではなからうか。

漢詩・漢文も明治以後、西洋文学に取ってかわられ、急速に魅力を失って行く。一方、俳諧も同じ頃衰亡の一途を辿っていた。そのような時代に、俳諧を受けつぎ、漢詩・漢文に深い教養と愛着を持った者が、どのような運命を辿ることになるか、それは想像することができるところである。

石洲師は伊勢派の正統を襲ぎ、漢詩・漢文が得意であったために、明治以後の西洋文学一辺倒の潮流に合わず、その為に晩年は殆んど、その俳諧を理解し、相手となる人を失い、俳諧師としては不本意と思われる独吟を作って僅かに心を慰めることになったのは、まさに近代における俳諧師の悲劇である。

「芭蕉の雫」の巻頭論文「正風俳諧の伝統美」には、俳諧から発句を取り出して俳句と名づけ、脇句以下を非文学として斬りすてて、俳諧衰亡の一因を作った正岡子規ならびにその一派の文学に対して、忌憚のない批判が加えられ連句の伝統に対する讚美と鼓吹がなされている。この文章は何時書きおろされたのか、はっきり分らないが、すくなくとも「芭蕉の雫」が発刊された昭和三十一年九月より遡ることは確実であり、昭和三十年代の日本人の連句に対する冷い態度を知る私に取っては、いかにこの論文が勇氣に

露下数峰青
表六句のみを挙げたが、これで作品の大体の水準と傾向は察せられるであろう。石洲師は十三歳の時から実父実幹より漢詩漢文を習い、その深い素養が自ら發揮されたもので、和漢・漢和などの作は決して一朝一夕ではできるものではない。石洲師の門人、蝸牛・窓月・南天・二季らの人々は、それぞれ、師を相手に和漢・漢和の作を物しているが、これはこの一門の俳諧の特色を示すものであろう。たとえば、

露翁をしのびて 昭和二十九年十月

祖翁をしのびて

露乎靈乎芭蕉の雫尊くも

狭庭しゞまを養虫の鳴く

歌人はいざよふ月に筆とりて

袴の色も時代つきなり

紋瓦凍てしがままに白々と

蕾咲きそめ尖る冬薔薇

この巻を前に掲げた「初職」の表六句に比較してみると、その表現にこそ相違は見られるが、丈高い発句に、脇はその家の庭の有様、第三には客人の様子、四句目はその会釈、五句目は天象を詠み、折端はその下の景を叙べるといふパターンが決まっております。背後には濃厚な古典趣味が感ぜられる。

この漢詩・漢文を中心とする古典趣味は、芭蕉に始まり、蕪村によってさらに昂揚されたところのもので、それ自体

富んだ、先見の明のあるものであるかが十分理解できるのである。
昭和四十六年刊の「陽田の土」は、地誌的要素が強い作品であるが、それでも巻頭に「正風と新派の内面機構に就いて」という文章とともに両吟百韻一卷と、両吟歌仙三巻・三吟歌仙一卷・四吟歌仙一卷の外、独吟歌仙八巻を収録している。このうち、両吟の歌仙一卷と百韻一卷とは前者の掲載浅れであるという。要するに、対吟者としては門人の二季・南天・窓月に限られ、あとはすべて独吟であった。昭和五十五年刊の「正風俳諧新秋津洲」には「芭蕉の雫」に掲載された「正風俳諧の伝統美」が再録され、さらに「明治以後の神風館に就いて」なる一文が加えられ、神風館十九世を称した藤波窓月の襲号のいきさつを記し、前後の伊勢俳諧の墮落のあとを描いている。

外に百韻二巻、歌仙五十五巻、この中には和漢・漢和二十四巻を交じているけれども、これらはすべて独吟であった。
石洲師は昭和五十年代になってからは、昭和六十一年に没せられるまで、完全に知友・門下から離れ、独吟を楽しんでおられたのである。

平成三年刊の遺著「正風俳諧左義長」は和漢六巻、漢和四巻を含む歌仙四十巻が収録されているが、これもすべて独吟である。

左義長の巻 昭和五十七年一月
疾風一陣鬨を過りて大左義長 石洲

鉾杉繁み和む初鶏

寒食と詩箋に染めし筆なれや

明治老来いとどすこやか

遠つ山淡き白きは月の出か

野菊完し温泉への道

笛太鼓胡弓も妙に秋祭

三更知らず泌みる移り香

身は恋の焰の相を寂光と

色即是空西鶴の文字

懐しむ梅津の村もこのわたり

青葙原に残る月影

飛来り飛行く螢小さけれ

農薬被害消えて年経ぬ

伊勢志摩の道路工事は順調に

二軒茶屋餅匂ひさへ好し

チラホラとテレビラジオの花便

古き真垣を胡蝶かろやか

朝霞棚引く中ゆ延曆寺

吾妻惣ばぬ山號の碑に

旅にして事ども多き憐情や

燭台一つまぼろしもがな

南島の峠を越せば霰空

浮寝伸々集ふ水鳥

文鎮の代りと思ひて石運び

翁年八十極む篆刻

世のさまに睨重きは常ながら

北方領土返還の急

美しき暁にも似つる月今宵

碇止む頃小男鹿の声

露しと、萩の瑞枝は垂れしま、

船江の里を終の栖と

かにかくに釣道楽は親譲り

御奉行慕ふ事蹟数々

比ひなき花前山の名所図絵

春の日影を落す文机

この完成された美の世界は、やはり伊勢の名家に生まれ、

幼年時代から漢学・漢詩、そして俳諧の世界に没頭した石

洲師独自のもので、門人と言え、到底うかがうことの出来

ぬものである。わが好みに従い、わが好みの作品を作る。

そこにはもう悲劇性など感じられない、悠々自適の境界が

ある。

あるいは思うに、石洲師は俳諧の祖である伊勢の荒木田

守武の有名な独吟千句（守武千句とも云う一五四〇成立）

に倣って、廃れ切った俳諧に、何か新しい道を示そうとさ

れたのではなかったか。

師の本意が那辺にあったか、今は確かめる術もないが、

私は昭和三十年代、連句が非文学として世間から一顧もさ

れなかった時代を経験しているだけに、あくまでも孤高の

道を力強く歩み続けられた石洲師とその作品に、深い敬意

を捧げるものである。

歌仙三卷

膝送り猫柳

冬と春かくれんぼして猫柳

午後から風の荒るるきさらぎ

雛の店思ひがけなく二丁目

笑ひ顔する怒り顔する

待宵をちよっぴり齧りとなつてあし

そろりそろりと穴に入る蛇

谷川に燃えうつりけり紅葉山

すっぽんぼんで寝まるならはし

ラーメンのあの匂ひが気にかかり

いざとなつたら銭で済ませる

隠れ家は近江の国の懐に

北を埋むる雪しまきなり

流行の見せびらかせるスキー靴

学生寮でイッキイッキと

城跡の夏の満月揺れはじむ

鯉黒々と沈みたる池

花散りて十一面の大頭

村人集ひ草摘みに行く

明時曹照

雅彦敏人彦雅

敏人彦雅 敏彦 雅彦 敏人彦雅 敏彦 雅彦 敏人彦雅

そのあとに勘三郎の影臘

テイラミスつくる姉といっしょに

通るたび肩に觸るるよ小鳥籠

神田祭の噂さまざま

爆撃の楯に市民をあつむると

唇を合せる戦場の砂

なるやうになれとはやなるやうになり

たったいちどで孕むかなしき

月明の回顧展いますぐそこに

えんまこほろぎうすばかげろふ

すさまじの胸の肋のくつきりと

夢のまにまに山婆となる

枯草に野辺の送りの煙立て

畦に交はる街道の辻

子を連れてビートル連れてお散歩に

行進曲はトランペットを

庭の闇はつとふくらむ花容れて

旅の半ばに暖かき雨

平成三年二月十七日

於 俳句文学館

連衆

東

間

明

雅

(出句順)

古

井

照

敏

人敏彦雅人敏 雅彦敏人彦雅 人敏雅彦 敏人

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第三十七回 猫蓑会

第三十七回猫蓑会は四月二十五日(木)、江東区亀戸天神社事務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行奉納し、そのあと、二十韻九巻を首尾した。

第一部 正式俳諧興行 「藤房や」一巻
 第二部 二十韻九巻

(一) 役割

宗匠	秋元正江
脇宗匠	式田和子
副宗匠	内田麻子
執筆	福井隆秀
知司	豊田好敏
副知司	瀧川雅代
座配	小林千雪
座見	小川健悟
花司	原田千町
配硯	梅田利子
同	篠原達子
同	蒲原志げ子

(二) 次第

- 一 席改め
- 二 席入り
- 三 配硯
- 四 献花
- 五 執筆登場
- 六 文台捌
- 七 知司挨拶
- 八 俳諧興行
- 九 花前
- 十 玉串奉献
- 十一 花の句披露
- 十二 端作り
- 十三 吟声
- 十四 文台返し
- 十五 作品奉納
- 十六 知司挨拶
- 十七 退席

二十韻 藤浪の

藤浪の揺れて八百八町かな
 晴れをよろこぶ仔雀の群
 春障子開け放ちやり文机に
 眼鏡のままであつたねの人
 ガウデイの塔にかかりし三日の月
 摘みしサフラン籠にいっぱい
 新走り酌み交はしつゝ恋に酔ひ
 猫と女房残る惜金
 海原はしんと凪るて真帆片帆
 骨折の腕布で吊るなり
 鬼の豆鬼無里の鬼を打ちに出
 厨にひびく葱刺む音
 両親も聞いて驚く旅プラン
 蚊を追ひ払ひ熱き抱擁
 月涼し今山の端を離れけり
 西鶴の本ありし銀行
 偽名画つかまされしが運の尽き
 トロットギャロップ手綱引き締め
 花ごころも帽子も対の老婦人
 半ばとなりし弥生狂言

好雅敏 明雅 健悟 和子 千町 雅代 麻子 志げ子 達子 千雪 清子 利子 郁子 澄子 淳子 文子 啓子 正江 執筆

藤の幻影

秋元正江

花ぐもりの季語に対して、藤ぐもりとも云える空模様で、まっ盛り寸前の藤房は、つまみ細工の花かんざしが目前に揺れているようなきっぱりした藤色で、傍の淡いピンクの藤房とあるかなきかの雨に濡れて清新な美しさである。

藤祭り正式俳諧も五年目を迎えて、明雅先生御指導の夫々の役割もすっかり身につけて、要所々々の発声、越天楽の奏楽、吟声の他は藤の社に濃密な時が過ぎ、配硯、花司の落着いた中にも華やかな所作、執筆隆秀さんの淡々として風格ある文台捌き、玉串を持たれた神官の往来など、正式俳諧は猫蓑会の財産になったと思う。

宗匠の大役をおおせつかった私は、緊張と責任でシャガールの眸のように境内の反り橋辺りにもう一人の自分をおいてきたような思いであった。

天神社では特別に、豊太閣所持の「秋野の文台」その他明治三十二年二月二十五日巻かれた俳諧連歌懐紙(この日は菅原道真公のお亡くなりになられた日であり、毎年忌日に巻かれていたとのこと)等の宝物を展示して頂いた。

会も果て最後の連衆と反り橋近く迄きたとき、端々しい高島田に水色の着物、白地に藤房を描いた帯も胸高に、日本画の世界、いや新派の舞台から抜け出たような、粹な美女にお会いすることができた。藤の雨の中、藤祭りの幻影として忘れることができない。

藤房や

中川 哲捌

藤房やゆらりと揺るる雨のなか
 声をこぼせる巢隠れの鳥
 雛の間に母似の吾子の熟睡して
 コーヒー淹れてミルクたっぷり
 都庁舎にかかりし月を仰ぎつつ
 色なき風に拾ひたる恋
 あの人も私も芋が好きでした
 猫がかりがり柱ひつつかく
 黄昏はそら恐ろしき空屋敷
 ヨットに飽きてハングライダー
 乾杯のビールジョッキになみなみと
 生臭坊主経い加減
 自衛隊機雷の数が気にかかり
 泣いて別れて写真抱きしめ
 ウイドウと騙しすり寄る寒の月
 赤の広場にいつか薄雪
 糖尿を一病として息災に
 金釘流の便り届きぬ
 花筵それぞれ開く手弁当
 田螺も脚を伸ばす昼過ぎ

哲 大前を浄めし雨や藤まつり
 冬乃 春惜しみつつ渡る反り橋
 シズ 目張煮るゆきひら鍋の匂ひひるて
 隆秀 ピアノ弾く子に漫画読める子
 弘子 冬櫛梢に懸かる鎌の月
 子 しやし憩ひし丹頂の羽
 秀 馴れ初めは紀ノ国坂の行き帰り
 乃 心はゆるゆるタワいらウンジ
 乃 掃海艇いよいよ出すと決断す
 乃 後手後手になる投手交代
 乃 飼主に似てブードルも夏瘦せし
 秀 殺やぶりてふビールちびちび
 乃 新発意の東の廓母の里
 乃 抱きしめたは衣通りのきぬ
 哲 満月の波きらめける湖の紺
 乃 人間ドックで告げられし秋
 乃 都郷の旅の案内はワープロで
 乃 先生ひとり山の分校
 乃 枝垂れたる花の舞ひ来る昼下り
 乃 囀の中走るタンデム

藤房やかすかな風も見逃さず
 琴弾鳥のめぐる池の面
 舟当の諸子ふっくり炊き上げて
 書き取り帳をうめる百遍
 手焙りをすすめられたる縁の月
 プレイルームに對のセーター
 カードでは弘ひ切れぬ恋の残
 色即是空 空即是色
 小半が適量といふ下戸と呑み
 「でんでん虫々」ちよっとはづれる
 黒人のマラソン選手汗光り
 掃海艇の乗船を拒否
 嫁入りをひかへ猫にもいとま乞
 ★トランタンでも未だバージン
 三日月にいたづら悪魔ぶら下り
 村上龍よむすずる寒
 呆けはじめすっかり焦げし焼秋刀魚
 効能書も知らぬ湯治場
 山々のめぐる安曇野花万朵
 茶揉みの香り低くたゆたふ
 ★トランタン：フランス語・三十才

藤まつり

山口みづる 捌

藤房や

若松 香捌

みづる 藤房やかすかな風も見逃さず
 富美 琴弾鳥のめぐる池の面
 正江 舟当の諸子ふっくり炊き上げて
 文子 書き取り帳をうめる百遍
 江亭 手焙りをすすめられたる縁の月
 杉亭 プレイルームに對のセーター
 江亭 カードでは弘ひ切れぬ恋の残
 子 色即是空 空即是色
 同 小半が適量といふ下戸と呑み
 美 「でんでん虫々」ちよっとはづれる
 子 黒人のマラソン選手汗光り
 同 掃海艇の乗船を拒否
 子 嫁入りをひかへ猫にもいとま乞
 子 ★トランタンでも未だバージン
 子 三日月にいたづら悪魔ぶら下り
 江亭 村上龍よむすずる寒
 美 呆けはじめすっかり焦げし焼秋刀魚
 美 効能書も知らぬ湯治場
 同 山々のめぐる安曇野花万朵
 同 茶揉みの香り低くたゆたふ
 文 ★トランタン：フランス語・三十才

「配視役」うわの空の記

梅田利子

二、三日前の天気予報では、藤祭りの当日は雨との事、何とか予報がはずれてくれればと願いましたが、朝出掛ける時はかなりの雨。幸いにも亀戸天神に着く頃にはすっかり上がっていて、丁度駅でお会した正江様と、まだ人出のない境内を、しっかりと雨に濡れた七分咲きの藤の花を賞でながら、しばしそゞろ歩く事が出来ました。

正式俳諧の配視のお役をさせて頂くのは今回で四回目。四度目ともなれば、そろそろベテランの域に達しなければならぬ筈ですのに、人前では上がり屋の私、相変らず視箱をかたかたと鳴らせて居りましたのを懸命なる宗匠、協宗匠様方には、お見逃しなさる筈もございません。

それに比べて、達子様、志げ子様は、光ヶ丘近隣センターの最初の練習一回で万事をお呑み込みになり堂々としていらっしやるのには感心させられてしまいました。一昨年の時雨忌に初めて配視役をいたしました時、大変嬉しい事に正式俳諧のビデオテープを頂戴する事が出来、次回からテ

テープを見てお復しすることが出来て大変重宝いたしました。又家族にも、百聞は一見に如かずで、居ながらにしてこの様な立派な儀式としての俳諧の認識を新たにしています事が出来て、その後私は大手を振って連句会に出掛けられる様になりました。猫襲会に入会して間もなくの頃、初めて正式俳諧を拜見しました時、私にとって大変な驚きでした。連句の世界ならまだしも俳諧にもこんな立派なセレモニーがあるなんて。明雅先生の連句辞典の「正式俳諧興行」を見ますと、最初の文台捌きを中心とした俳諧興行は、京都妙満寺で寛永二年（一六二五年）頃、貞徳以下連衆十名で百韻興行が行はれたと書かれています。

儀式と言う視点から日本の伝統的な芸道 を思い返して見ると、茶道を始めとして、果ては民間に伝承される神事まで、連続と続く伝統的な儀式は数限りなくあります。日本人はセレモニー好きなのでしょうか。古来から日本人はそれぞれの道に、精神を昂揚し浄化させる方法を儀式という形式の中に培って来たのかも知れません。（鈴木勝忠）を読ませて頂きますと、その

